慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 書評 ロココ人のカント？ |
| Sub Title | (Book review) Kant als ein Mensch des Rokoko? |
| Author | 吉田, 量彦(Yoshida, Kazuhiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication year | 2005 |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.20 (2005. ) ,p.121- 127 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20050000-0121 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

# ロココの人カント？

Gernot Böhme, Kants Kritik der Urteilskraft in neuer Sicht. Frankfurt am Main (Suhrkamp), 1999.

吉　田　量　彦

今年（2004）の春先に『下妻物語』という映画が封切られたのを覚えておられる方は多いのではないか。茨城県中西部の田園地帯にある下妻という小さな町を舞台にした，エキセントリックな二人の少女の織りなす友情物語で，ハリウッド映画のような派手な銃撃戦も色恋沙汰も出てこない。要するにあまりお金をかけていない地味な映画だったらしいのだが，その割にはかなりの評判だったと聞く。

残念ながらわたしは見逃してしまったが，後で映画の原作になった小説[1]を偶然古本屋で見かけて，買ってみた。高校卒業まで同じ茨城県で生まれ育ったにもかかわらず，下妻の辺りには一度も行ったことがない。近くて遠い異郷に足を踏み入れるような気分で読んだ。

ロリータと言われるやたらと装飾の多い少女服があるそうで，主人公の桃子はそういう服の熱心な信奉者である。ある日桃子は，ふとしたきっかけで，一昔前の暴走族装束に身を固めたイチゴという女の子と知り合う。

---

(1)　嶽本野ばら『下妻物語』小学館文庫，2004（単行本初版2002）。

二人は様々な事件に巻き込まれながら，極端な趣味の相違（主に服装）にもかかわらず，不思議な友情を育んでいく。昨今の現代文学には珍しく，とても読み心地のいい小説だった。興味のある方は一度手に取られてはいかがだろうか。

誤解のないよう言っておくと，本稿は『下妻物語』の書評ではない。従って内容についてこれ以上詳しく解説する必要はないし，そのつもりもない。にもかかわらず，なぜ『下妻物語』から話を始めたのかというと，書き出しの数ページを読んでいる時に奇妙な既視感を覚えたからである。

『下妻物語』は桃子の一人称で書かれている。その冒頭で桃子は，「ロリータ系のお洋服」に夢中になる自分の美意識を「ロココな精神」と表現する。ロココというのは「18世紀後半のおフランスを支配した，もっとも優雅で贅沢な時代。（中略）1715年ごろから70年辺りまでの（略）なーんにも深く考えず，四角いよりは丸いほうが可愛いじゃんという理由のみで採用された曲線美と，荘厳なバロックの男性的ダイナミズムってちょっと息が詰まるし，真面目くさって面白くないからと考案された華やかで繊細で女性的，といえばきこえはよいものの実に軽薄な装飾様式のこと」だという[(2)]。

このすぐ後に，同時代を生きながらロココ趣味を全面否定した人物として，『百科事典』の編纂で名高い哲学者ディドロ Denis Diderot（1713–84）の名が出てくる。しかし，桃子は知らなかったようだが，同じ時代のドイツにディドロより哲学史上遥かに有名で，しかも遥かに強く「ロココな精神」を共有していた一人の哲学者がいたのである。名をイマヌエル・カント Immanuel Kant（1724–1804）という。

カントが生まれ育ち，その生涯のほとんどを過ごした街ケーニヒスベルク（Königsberg，現ロシア領カリーニングラード Kaliningrad）は，バルト海の奥まった所に位置するため，ロココの本場パリと比べると東京と下妻くらいの格差がある辺境の田舎町のように思われているが，事実は必ず

---

(2) 『下妻物語』 7ページ。

しもそうではなかったことを最近の研究が示している[3]。海上交通の要所として，少なくとも欧州の他の大都市からの情報はいち早く伝えられていたようだし，また欧州各地から教養ある貿易商や外交官が絶えず訪れていた土地でもあった。流行の発信地フランスからの電波を受信する基盤は意外と整っていたのである。ディドロより少し年少のカントが成人してまず知った美の基準は，フランスわたりのロココ趣味だったと考えられる。カントは第3の主著『判断力批判』の前半部分を今日の言葉でいう美学の問題に，つまり人間が美を感じる際の判断力の働き方の分析と解明に捧げているのだが，この『判断力批判』前半の美学論にもこうしたカント自身のロココ的感受性が何らかの形で影を落としていることは疑えない。

とはいえ，このような視点から『判断力批判』を読み解こうとした研究はこれまでほとんど存在しなかった。この研究史の盲点に果敢に踏み込んだのが，ここに紹介する『カント「判断力批判」の新しい見方』の筆者，ダルムシュタット工科大学の哲学教授を勤めるゲルノート・ベーメである。原著は索引など含めても130ページ少々と薄いが，その限られた容量を縦横に駆使し，読む者に様々な示唆を与えてくれる。

そこに貫かれているのは「カントが挙げている実例を真剣に取り上げてみる」態度である[4]。これまでの大部分のカント研究者たちは，『判断力批判』の文献学的・体系的に厳密な読解に拘る一方で，カント自身がそこに挙げている様々な「ひとが美しいと感じるもの」の実例を真剣に取り上げようとしてこなかったとベーメは考える。

たしかに，カントが今日的意味での芸術作品とほぼ無縁の生涯を送ったことは疑いない。実物を見たことがない有名な古代の彫刻とか，音楽にいたっては近くの教会の（かなり下手だったと思われる）素人聖歌隊の合唱

---

(3)　Manfred Kühn: Kant. Eine Biographie. München (C. H. Beck), 2003. (Englische Originalausgabe 2001), S.74f.

(4)　Gernot Böhme: Kants Kritik der Urteilskraft in neuer Sicht. Frankfurt am Main (Suhrkamp), 1999. S.8.

とか，『判断力批判』の中で名指しで言及される芸術作品といえばその程度のものがほとんどである[5]。後世の研究者たちがカントの審美眼に不審を抱くあまり，カント自身が美しいと判定したものの具体的内容に詳しく立ち入りたがらないのも分からないことではない。

しかしカントの挙げるこうした実例の中には，かなり興味深いものも混じっているとベーメは言う。それは他でもない，我々が今日の言葉で言うところの「デザイン」，つまり品物の装飾に使われる様々な意匠と，それを用いて装飾された品物（家具や食器や衣類やアクセサリー）である。それどころか，一見自然の領域からただ取られてきたかに見える草花や鳥の声といった例ですら，実は人々の生活を彩る装飾と見なされている節があるという[6]。カントの脳裏に一番身近なものとして浮かんでいた美の実例，彼自身の美的体験から直接引き出されている実例は，こうした数々のデザインであったと考えて構わないだろう。

カントといえば謹厳実直な大学教授，毎日の生活サイクルを時計のように厳密に守る面白味のない人物というイメージが広まっている。恐らく誰かが冗談で言い出したことだろうが，いつも同じ時刻に同じ場所を散歩するカントを見て街の人々が時計を合わせたという，変な逸話がまことしやかに語り伝えられているほどである。審美眼なき美学理論家という偏見も，およそこうした没美感的で無味乾燥に見える生活スタイルから生じてきたものだろう。しかしこうしたイメージは，伝記的史料を見る限り，全てが嘘ではないものの，かなり割り引いて考えておく必要がある。カントがこういう異常なまでに規則ずくめの生活に本格的に入るのはかなりの高齢になってからのことなのである。人間というものは，年を取れば誰でも多かれ少なかれ規則正しい生活をするようになる。そのカントも若い頃には，

---

(5) これは後半の崇高論にも当てはまる。ひとが崇高さを感じるものの実例として挙げられる巨大建造物や自然の大景観を，カントは一度も自分の目で見たことがない。自宅の書斎で読んだ旅行記の中から抜いて来たのである。

(6) Böhme, Ibid. S.21f.

社交が過ぎてはめをはずすことも度々あった。30代の頃には，下宿までどうやって帰ったか覚束なくなるほど飲むこともあったという[7]。

人と交わることを心の底で厭うていたかはともかく，カントが最晩年に至るまで社交的な人間であったことは史料からも疑えない。大学教師として，また故郷の町の名士として人前に出る機会の多かったカントは，流行の服装などにも少なからず気を遣っていたらしい。『判断力批判』で引き合いに出される数々のデザインは，こうした社交の場でカント自身が身にまとったもの，あるいは彼の目に映ったものの中から選ばれたと考えられる[8]。

当時そうした社交の場を席巻していたのが，他ならぬロココ趣味であった。「カントは一人のロココ人である」[9]と看破したベーメは，フランスの貴族階級から発して教養市民層に広まったロココ的デザインの基本的特徴を，浮世の生活をひたすら装飾的に盛り上げて，その影にある深刻なこと，大変なこと，煩わしいことを覆い隠そうとする傾向に見る。決まりきったもの，硬直したもの，直線的なものを徹底的に拒むロココの描線は，それこそ「なーんにも深く考え」てないのではないかと思わせるほど奔放で取り止めがなく，先の『下妻物語』の記述との不思議な一致がここにも見出されるのである。

こうしたロココ趣味，少なくとも哲学者カントの脳裏に浮かんでいたロココの描線を，単なる現実逃避願望の現われと切り捨てることはできない。目の前の現実を一歩退いて眺めることは，眺めようによっては，「現実」という名目で浮世を支配する惰性的秩序から距離を取るための第一歩にもなる。ベーメがシラーを引き合いに出して指摘するように，たしかに「規律ずくめのこの世に対し，美は自由の王国の現れとなる」のである[10]。カ

---

(7)　Volker Gerhardt: Immanuel Kant. Vernunft und Leben. Stuttgart (Reclam), 2002. Kap.2.

(8)　Böhme, Ibid. S.24f.

(9)　Ibid. S.26.

(10)　Ibid. S.26.

ントにとって，ロココ趣味に彩られた社交空間は，ひととひとが現実世界の惰性的秩序に流されずに自由な交わりを行う空間，少なくともそうした交わりを理念的に象徴する空間であった。逆に言えば，カントの考える美は，そうした自由な交わりの空間を彩るものとしてある。もとよりこれは，美あるいは美術品を社交の手段に貶めようとするものではない。しかしそもそもカントが指摘した美の特徴とは，常に他人への伝達 Mitteilung を，少なくともその可能性 Mitteilbarkeit を伴うものであった。ひとは他人との交わりを全く絶たれた状況では美について思いもしない。いや，何かを美しいと判断することは，とりもなおさず，美しいと判断しているこの気持ちを不特定多数の他人に伝えたい，彼らと分かち合いたいという願望と不可分に結びついている[11]。世間との交わりを絶って引きこもっている人ですら，すばらしい詩や小説や画集を目にしたら，その感動について誰かとチャットで語り合いたくなるだろう。美とはそういう，根源的に社交的な現象なのだとカントは考えている。

ロココ的調度品に彩られた空間に自らロココ的衣装をまとって入るとき，人々は現実のしがらみから切り離され，いわば「自由な」雰囲気を共有する。人々の間の自由な交わりを可能にする雰囲気を醸し出すものこそ，カントによれば，人々が「美しいと判定するもの」なのである。われわれ現代人はカントのロココ的美意識を（『下妻物語』の主人公は例外として）ほとんど共有していないから，正直なところ，ロココ的装飾が当時どれほどこうした雰囲気作りに貢献したかどうか，わたしには全く見当がつかない。ただカントが自らのロココ趣味に仮託して言おうとしたことは，たとえロココを他のどんな美術史上の様式に置き換えてもその妥当性を失わないだろう。ひとが何かを美しいと感じる心の仕組みには，一切の私的関心（たとえばこの何かを自分だけの所有物にしたいとか）が関わっていない[12]。

---

(11) Ibid. S.32f.

(12) Kant: Kritik der Urteilskraft. Paragraph 5.

少なくとも，関わっていないはずだとひとは考える。だからこそ，ひとは美の問題については，道徳の問題と同様，自他が置かれている具体的現実的なしがらみを捨象した上で，万人に「自由な」同意を求めずにはいられなくなるのである。もし同意が得られなければ，そこには道徳の場合と同様，自分の側か相手の側のどちらかに（あるいはどちらにも）判断の客観性をゆがめる何らかの私的関心が密かに働いていることになる。つまり自分か相手のどちらかが（あるいはどちらも）「自由」ではないことになる。

紙数の都合上前半部分の美の問題に的を絞らざるをえなかったが，ベーメは『判断力批判』全体に渡ってこの「実例を真剣に取り上げる」読み方を実践しようとしている。本稿で取り扱わなかった後半部でも，たとえば『判断力批判』の「崇高論」で実例として出されたピラミッドやアルプスの例を手がかりに，カントが同時代の自然神学の問題意識を継承しつつ，その思考様式を巧みに世俗化（神に向かう崇高論から理性的存在者としての人間の自覚に向かう崇高論へ）していく経緯が明らかにされる[13]。また続く章では，砂浜に残された幾何学図形を見てそれを描いた理性的存在者（人間）が必ずいるはずだと判断する，という目的論的判断の実例を取り上げ，その起源をいくつかのローマ時代の古典に探った上で，その背後に同じく自然神学的思考様式の変容（創造する神に向かう目的論から自己再生する有機体の目的論へ）を見ようとする[14]。もともと独立して発表された先行論文を集めて改稿し，これに何章か書下ろしを加えて刊行されたせいか，正直なところ，切り口の異なる主題を「実例の真剣な検討」を合言葉に少し力ずくでまとめたような部分も散見される。しかし「判断力批判を斜に構えて読んでみる　querlesen」[15]ベーメの試みに抗しがたい魅力が宿っていることは，読む者の誰にも明らかとなるだろう。

---

⑬　Böhme, Ibid. S.106 etc.

⑭　Ibid. S.118f.

⑮　Ibid. S.12.